

陀羅尼落葉

一名 落葉

前

ワキ

北国の僧

シテ

里女

後

ワキ

前に同じ。

シテ

落葉の宮

ワキ次第

「月を都のしるべにて。く。越路の秋を出でうよ。

詞

「是は北国方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふ程に。此秋思ひ立ち都に上り候。

サシ

「万里にして人南に去り。三春の雁北に飛ぶ。

道行

「花は唯。越路の春やまさるらん。く。都の空を別れ来し。名残を今も音に立てゝ。月にと急ぐ狩衣。遥けき旅の行方かな。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。是は早都の辺にても小野とかや申すげに候。あら笑止と立ち重なりたる霧や候。唯今の気色にて古言の思ひ出でられて候。荻原や軒端の露にそぼちつゝ。八重立つ霧を分けぞ行くべき。

シテ詞

「なふくあれなる御僧。今の歌をば何と思ひよりて詠じさせ給ふぞ。

ワキ詞

「是は始めて都へ上る者にて候ふが。まだ踏みなれぬ道のべに。いとゞ深むる夕霧を。分けん方なき

あはれさに。古言の思ひ出でられて。唯何となく
口ずさみ候ふよ。

シテ「是は夕霧の大将と聞えし人の。此所にて詠ぜし歌
なり。其心をも知ろし召して口ずさび給ふかと。
思へば尋ね申すなり。

ワキ「いやそれまでは知らねども。唯秋霧の分けま憂き
に。よそへて思ひ出でたるなり。

シテ「さては其心を知ろし召さゞりけり痛はしや。行か
ん都のつてとても。まだ程遠き夕霧を。いかで迷
はせ給ふべき。

詞「草の肩はいぶせくとも。一夜を明かさせ給ふべし。

ワキ「実に有難き御事かな。さらば御供申さんと。

シテ「そことも知らぬ小野の細道。

ワキ「末もつゞかぬ。

シテ「かたへの野べの。

地「入方に。なり行く秋の夕日影。く。空の気色も

冷ましくて。蝸の。声さへしきる山の陰は。をぐ
らき心地のみ。心細き夕べかな。我住む方の庵と
て。帰り馴れずは旅人の。いかでか分けん道なら
ん。く。

ワキ詞
「今宵の御宿かへすぐも有難う候。さてく先の
御詠歌に付いて。夕霧の大将とやらんの。此所へ
御入りありたる由聞え候。さて此小野には如何な
る人の住ませ給ひて候ふぞ。

シテ詞
「此所には一条の御息所の御物の怪にて。暫く住ませ
給ひしなり。同じく御息女落葉の宮も。母御に付
き添ひ住ませ給ひて候。

ワキ
「あら面白や落葉の宮とは。如何なる名にて候ふぞ
委しく御物語り候へ。

シテ
「さらば語つて聞かせ参らせ候はん。さなきだに女
の身は。五障三従の罪深きに。世を背かんの心の
本意も。叶はぬ其身の昔語。かたりて聞かせ申す

べし。御跡をよくく弔ひ給ひ候へ。

地クリ

「そもく此落葉の宮と申すは。光る源氏の兄。朱雀院女二の宮。一条の御息所の御息女なり。

シテサシ

「其頃柏木の衛門の督と申し人。

地

「折しも春の暮つ方。風吹かず。かしこき日影を興じつゝ。故ある木立の花盛。わづかなる。萌黄の陰に乱れつゝ。挑み争ふ鞠の数。暮れ行く庭に思はずも。手飼の猫のまつはれし。

シテ

「小簾の外漏れし面影の。

地

「身に添ふ絆となりたるなり。

クセ

「恋の奴となりはつる。思ひや延べんとばかりに。

縁の露を結びしも。契りの中は身に染まで。もとよりしみにし方こそ。猶茂り行く草の名の。慰めがたき姨捨にて。諸かづら。落葉を何に拾ひけん。名は睦ましきかざしなれども。かくいひし言の葉の。我名に合ふぞ悲しき。其後をりを得て。思ひ

の末はなよ竹の。一夜結びし手枕を。かはす程なき衣々の。袖に余れる白露の。起きて行く。空も知られぬ明暗に。何処の露のかかる袖の。思ひの色をさすがとや。人のあはれの露かけて。

シテ
「明暗の。空に憂き身は消えなゝん。

地
「夢なりけりと見てもせめて。慰むべくといふ声を。聞き捨て出でし魂は。我を離れてさながらに。人にとまれる心地して。うつし心も涙のみ。其身を

責めて絶えし人に。我身はかなき契りこそ。消えしにまさるつらさなれ。

ロンギ地
「昔語の言の葉の。奥ゆかしきを同じくは。心に残し給ふなよ。

シテ
「世語りを。語ればいと古へに。又立ち帰る袖の波の。あはれはかなき身のはてし。よくく弔ひてたび給へ。

地
「思ひよらずや御跡を。弔ふべき御身誰ならん。

シテ「此上は。我名をいはん夕霧の。迷ひを晴らしおは
しませと。

地「我也音を泣く雲井の。雁金寒み吹く風の。誘ふと
ばかり失せにけり。く。 (中入)

ワキ詞「唯今見えし夢人は。唯人ならず思ひしに。さては
いにしへの夕霧に迷ひの心を残し。我に言葉をか
はしけるぞや。いざや御跡弔はんと。説くや御法
の花の紐。く。永き闇路も終に今は。若生人天

中受勝妙楽。若在仏前蓮華化生。

後ジテ「あら有難の御経やな。く。有りし世を思ひも出
でし今は早。妙なる御法の値遇の縁に。玉磬の声
は管絃を奏する事を思ひ。衲衣の僧は綺羅の人に
越えたり。いよく仏果を授け給へ。

ワキ「不思議やな千種の露の色々に。錦を連ぬる花の袖
口。そこはかとなき面影は。ありし一夜の主やら
ん。

シテ「御弔ひの有難さに。恥かしながらいにしへの。草の陰なる魄霊の。是まで顕はれ参りたり。」

詞「思ひ出でたり此所にて。何某の律師貴き御声を上げて。陀羅尼読みたりし事。今のやうに思ひ出でらるゝぞや。阿檀陀意。」

地「檀陀婆地。」

シテ「檀陀婆帝。（序の舞）」

シテ「得聞是陀羅尼者。当智普賢神通之力。」

地「若但書写。是人命終。当生忉利天。是時八万四千の天女。伎楽の声々有難や。（破の舞）」

シテ「嵐にしたがふ木々の落葉。」

地「嵐にしたがふ木々の落葉は。簫瑟を含み。」

シテ「石に濺ぐ。」

地「飛泉の声は。」

シテ「雅琴を弄ぶ。」

地「伎楽の遊び。」

シテ「法の御声。

地「合ひに合ひたり虫の音鹿の音。滝つ響きも一つに乱るゝ。小野の千草の。露に立ち添ふ野分の風に。錦を飾りし梢のもみぢ。錦を飾りし梢のもみぢ葉。木陰の落葉と朽ちにけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション
『謡曲評釈 第三輯』大和田建樹 著